

---

# どれだけ時間が過ぎても

トウコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

どれだけ時間が過ぎても

### 【Nコード】

N7820V

### 【作者名】

トウコ

### 【あらすじ】

中学生と、お母さんがつれてきた家政夫の話。

初恋の味の続きです。

## 1 (前書き)

初恋の味の続きです。  
克大の回想。

時が経てば子どもは大人になるのだと知っていた。  
当たり前のことわりだ。

しかし、大人になるということがどういうことなのか、具体的に想像したことは一度もなかったような気がする。

別れたとき十四だった子どもが今、二十二の姿で自分の前に立っている。

身長はさほど変わっていないが、顔つきが違う、体つきが違う、着ているものが違う。だけど、そこだけは変わらない猫に似た目で見つめられ、大島克大は足元から石で固められてしまったかのように硬直した。

「ねえ、聞いてる？」

深い紺のスーツと、赤地に細い白のストライプの入ったネクタイ。あのころは前ホツクの学生服だった。さっきまでモニターを見ていたはずの目は疲れも知らず澄んでいる。自分たち以外に誰もいないフロアはしんとしていて、彼の声がよく通る。聞こえないはずはない。

「おれ、克大さんのこと好きだよ」

それはついさっきも言われた言葉。そして、ずっと以前にも聞いたことのある言葉。ただどあのときのように受け止められない。

戸惑う克大を見つめたまま、直哉は微笑した。子どもというより猫のように。

「どういう意味なのか、説明しなくなっただけわかるよね」

彼はもう、すっかり大人の顔をしていた。

鈴木直哉と初めて顔を合わせたのは、かれこれ十年ほど前のことである。彼は当時つきあっていた年上の女性、鈴木しおりの息子だった。

その日、初めて自宅に招かれることになっていた克大は、待ち合わせ場所がよく見える道端の露店で屈み込み、しおりが来るのを待っていた。少し早くついてしまったから時間を潰していたのである。売り物はシルバーアクセサリー。露店を広げていたのは友人で、克大は店の外側ではなく内側の低い椅子に腰かけていた。

蝉のうるさい、夏の日だった。

「せっつかくい大学出してもらったのに、おまえヒモになっちゃうの？」

日陰にいてもなお暑い中、パタパタと団扇で自らを扇ぎながら、顎髭のむさくるしい店主は言った。みんなが「コマ」と呼んでいたため克大も自然そう呼んでいたのだが、本当の名前は今でも知らない。

「なにそれ、誰に聞いた？」

「中田。克大が年増女の家に移りこんでヒモをやるってさ」

克大は眉を下げ、アハハと笑った。

「あいつは」。どうしてそうねじまげるかな。確かに彼女の家に就職するわけだけど、ヒモじゃないし。年増っていうほどでもない」

「家に就職って、嫁にいくんじゃないかねだからヒモだろうよ」

「違うって。労働するもん」

「セックスだろ？」

「そんなもん労働のうちに入るか。家事だよ家事」

「家事イ？」

サングラスの上の細い眉を歪め、コマはすっとんきょうな声を上げた。

「そんなんできんの？ おまえ、あれだろ、おぼっちゃんなんだろ？」

確かに実家は裕福だ。父はいわゆる地元の名士というやつで、ス

パー、ガソリンスタンド、工務店、いたるところに同じ名字がくつついている。どの誰がどういう親戚なのか末端までは知らないが、克大は田舎でいうところの本家の次男坊というやつなのだった。「どんなおぼっちゃんでも、四年一人暮らしすりゃ家事くらいはできるようになるさ」

「掃除や洗濯はともかく、料理なんかできるようになるもんか？」

おれはいまだにラーメンと目玉焼きしか作れねえぞ」

「こつちきて最初につきあったのが料理学校の先生だったんだ。ただで教えてもらっちゃった。ケーキだって焼けちゃうんだぜ。作ってやるつか？」

「いらねーよ、男の作ったケーキなんか」

コマが心底嫌そうに言ったので、克大はまた笑った。

「ケーキ屋のケーキだって大半は男の手作りなんだぜー」

「それとこれとは話が別だ。……で？　今の彼女はなにやってんだ？」

「医者」

「医者あ！？　なんでそんな女と知り合えるんだ？　合コン？」

「まさか。主治医だったんだよ。盲腸切ったときの」

コマはかくんと顎を弛緩させた。

「主治医って、おま……、よく口説こうって気になるな……。いくつだよ、その、先生は」

「三十……五？　六だったかも」

戻った顎がまた落ちる。

「おまえいくつだよ！」

「二十二」

「普通つきあうか？　そんな年増と」

「だからそんなに年増じゃないって。うちの姉さんより若い」

コマは呆れたようにしばらく口を開けていたが、やがて盛大なため息を吐き出した。

「そうまで年いった女と同棲して、まさかいずれ結婚するつもりな

のか？ その若さで」

「さあ……。おれはしてもいいって思ってるけど、そう簡単にはいかないだろうな」

「なんでだよ」

「子どもがいるから」

「こ……っ」

サングラスがずるっとずれた。

「子どもオ！？」

「うん。今日会いに行く」

「バツイチってこと？」

克大は首を傾げた。

「さあ。どうなのかな。そのへんのことには訊いてない」

「訊けよ！」

「過去にはこだわらない方なんだ」

「興味ないのか？」

「あるよ。でも、言いたくないって感じだから、訊かなくていいかな」と

「心広いなあ……」

「だろー。心は広いし料理はできるし顔はいいし、おれほどの男はなかなかいないぜ」

にやっと口の端を上げたら、「そこまでは言ってるねえ」と後ろ頭をはたかれた。

「しっかし、子どもがいんのかよ。ひとり？ まさか二人も三人もいるんじゃないやだろな」

「ひとりだよ。えーと、十一歳？ 小五だって」

「小五！？ おまえ、今日一日でどれだけおれを驚かせりや気がするんだ。小五つつつたらもう自我めばえてるだろ。おまえみたいのが行って受け入れられんのか？」

「どうだろうなー。男だしなあ……。でも、どうなんだろう、男と女の子ってどっちがむずかしいと思うっ？」

「おれが知るかよ」

「だよなあ。あつ」

待ち合わせ場所にしおりを見つけ、克大は立ち上がった。

「来たのか？」

「そう、あそこにいる」

指さして教えると、コマはサングラスの向こう側の目を細め、値踏みするようにそちらを見た。

「うーん、まあ、確かに……」

「年増ってほどじゃないだろ」

「おれの感覚から言やあ十分年増だけど……。ま、美人だな」

「今度紹介する。じゃあな」

「そのときはナースとの合コンをセッティングしてもらってくれ」  
訊いとくよ、と笑い、克大はしおりのところへ急いだ。

\*\*\*

素直ないい子、だと、しおりは自分の息子についてそう言った。  
そしてとてもかわいいのだと。

実際に直哉に会ってみて、それが親の欲目ではなかったのだと克大は知った。

確かにかわいい。色が白く、目がくるんとして、背が低くて華奢だった。男の子のようにはちょっと見えない。かと言って女の子のようだというほどなよなよしているわけでもなく、その間の独特の雰囲気は彼は持っていた。

素直ないい子というのも正解だ。初めて会った瞬間、警戒されているのがつきりと伝わってきた。母親がいきなり男の家事手伝いを連れてきたら、普通はいぶかしく思うだろう。その気持ちを彼は隠そうとしなかった。警戒して、抗って、そのくせそういう態度を



取った後は決まって居心地悪そうな顔をした。

(ちよつと繊細そうだけど、秋人よりわかりやすい)

何日か一緒に暮らし、克大はそういう感想を抱いた。

秋人というのは一番上の姉の子で、だから克大には甥にあたる。

確か直哉よりいくつか年上なのだが、これがまったくよくわからな  
い子どもなのだった。いつもニコニコして当たり障りのないことし  
か言わず、いい子と言えばこの上なくいい子。しかし、内側まで本  
当にそうなのかどうか大人の目にもはかりかねた。

秋人に比べれば、直哉はずいぶん子どもらしい子どもだった。ふ  
たりに共通したところがひとつだけあり、それは母親の言うことを  
異様によく聞くといいところなのだが、秋人は母親に対する純粋な  
思いやりからそうしているのに対して、直哉は母親を必要以上にお  
それているように見えた。

直哉は、いつもリビングで勉強しているような、克大にしてみれ  
ばかなり変わった子どもだった。小食で生白く、外に出るのを嫌が  
った。それでもしつこく誘えば、「しょうがない」というふうにつ  
いてきた。元が素直なものだから、仲良くなるまでにさほど時間は  
かからなかった。

「おれ、海つて一回しか来たことない」

強引に海へ引っぱって行ったとき、きらきらと輝く水面を眺めな  
がら直哉は言った。

「幼稚園でさ、みんなと来ただけ」

「お母さんと来たことないのか？」

「ないよ。来たって楽しくないだろうし」

「なんで？」

「だって、お母さんと海つて、なんか合っていないでしょ」

その意見にはなるほどと思った。確かにしおりは海の似合うタイ  
プの女性ではない。どちらかと言えば、避暑地で読書、美術鑑賞と  
いう感じである。子どもを海へつれてきてボートをふくらませるだ  
とか、一緒に泳ぐだとか、そういうことはしないだろう。

父親がいれば違ったのかもしれない。ふたりと一緒に暮らす間に何度かそう思うことがあったが、直哉がそれを口にしたことは一度もなかった。しおりと直哉の間では、父親の存在は完全に消去されているようだった。

「よし、じゃあ今日はおれがボートをふくらませてやるぞ」

「ボート？」

「うん。ボート。シャチがいいなー。その前に、おまえ泳げるか？」

「プールなら泳げる」

克大は直哉の手を引いて砂浜に下りた。

借りたボートに直哉を乗せて沖に出ると、彼はビニールのシャチにつかまってじいっとしていた。ぱしゃりとも手足を動かさず。

「支えてやるからもつと楽しげに遊べよ。これじゃおまえ、荷物運んでるみたいじゃねーか」

「やだ」

「こわくないって。おれの足ついてんじやん」

「おれはつかないもん」

「うーん、よし、じゃあおれが揺すってやる！」

「え!？」

ゆさつと大きく左右に揺ると、直哉は泣き出しそんな顔をした。彼が振り落とされまいと取っ手にぎゅうつとつかまったから、さらに揺すった。足がバタバタして飛沫が上がり、やっと楽しげな感じになったのだが、本人は楽しいなんてものではなかっただろう。

「やだ! やだつて、やめてよ克大さん！」

「揺れてこそそのボートだろー。ほらほら、足で漕いで進めー」

ぐるん、と振り回すようにして向きを変え、沖ではなく岸の方へ向けて「えーい」と押しやったら、直哉はあっさり転覆した。

「あっ、バカ、手を離すなよ、つかまってるや浮いてんだから！」

驚きのためか、あれほどきつくつかんでいた取っ手を離し、直哉は沈んだ。さすがに焦った。じたばたしている体を水の中からすくい上げたら、彼はせいぜい息を吐きながら強くしがみついて離れな

かった。

「大丈夫か？」

水を飲むような暇もなかったはずだが、彼はしばらく「う、う」とうめくばかりで言葉らしい言葉を発しなかった。もしかしたら泣いていたのかもしれない。

首に直哉をぶらさげたままシャチを回収したけれど、それに乗ることはもうなかった。その夜、しおりにこの話をしたら、呆れられて叱られた。ちよつと加減してちよつだい、と。

「体中痛い。今日寝られないよ、絶対」

帰り際、道に伸びた長い影を見つめながら、直哉は言った。彼の体はどこもかしこも真っ赤っ赤。見ていてかわいそうになるほどだった。

「火傷と一緒にだからなあ。帰ったら氷で冷やしてやるよ」

直哉は辛そうに顔をしかめていたが、電車に乗るとすぐにうとうととはじめた。立っている上に吊革につかまれないものだから、腰に抱きつかせて肩を抱えてやらなければならなかった。

くっついた体は大人にはない独特の湿った熱を持っていた。子どもというのはこういうふうなのか、とめずらしく思うのと同時にひどくいい気持ちになった。

直哉は感情を表に出すのが苦手で、わざとひとつと突き放すようなところがあった。照れ屋なのだろう。母親が同じく感情表現の苦手なひとだったからというせいもあるかもしれない。他人に対して愛情を示すことがうまくできないようだった。それでも、不器用なやり方で甘える様子がいじらしく、たまらなくかわいく感じられた。

「なんだか最近、あなた、わたしより直哉の方を大事にしてるみたい」

しおりがそんなことを言い出したのはいつごろだっただろう。

直哉が眠ったあとの静かなリビングで、克大は笑った。

「比べる対象じゃないでしょ。かわいいのは当たり前じゃん。ナオ

はしおりさんの子どもなんだからさ」

当然のことだ。そう思った。

しかし、言ってから自分の答えにかすかな違和感を覚えた。何か胸にこつんとひっかかる感じ。

彼女の子どもだからかわいい？ それだけだろうか。

疑問が浮かんだが、表には出さず、それだけだよなと思い直した。そして、克大はその違和感をやり過ごし、あつと言う間に忘れてしまった。

そろそろいいと思うのよね、と言ったのはしおりの方だった。

それはふたりの関係を直哉に知らせるということであり、同時に結婚するということでもあった。

すでに実家の両親にはふたりで挨拶をすませていたが、克大はどうも今一步踏み切ることができずにいた。

愛情が冷めたとかそういうことではなく、罪悪感があったのだ。

克大は直哉にしおりの友人なのだと紹介されている。そして、子どものことだから当然なのだが、彼はそれをまったく疑っていない。事実を知らされたら、騙されたと感じるのではないだろうか。

直哉はすでに中学二年になっていたが、そのあたりをうまく受け入れてくれるかどうか。

克大はそれを察じていた。そして、そんな自分に違和感を覚えた。普段ならこんなことで悩んだりしない。思い立ったらすぐ行動し、あとのことは考えないたちなのだ。だけど、直哉に対してだけは慎重にことを運ばなければならぬような気がしていた。

「いいのかな、このタイミングで」

「大丈夫でしょう、もう十四なんだし」

「いやー、むずかしい年頃でしょ。いつそもつと小さいうちに言っていた方がよかつたんじゃないかなあ。ま、今さら言ってもしょうがないけど」

「平気よ。分別のある子だから。それに、あんまり先おくりにする」と、よけいに印象が悪くなるでしょ」

「うーん……」

分別があるからよけいにかわいそうなんじゃないだろうか。けど、しおりの言うとおり、先おくりにして解決するような問題でもない。ズルズルすればするほどだらしなく見えてしまう。友人の誘いで就職もしたことだし、今がちょうどいいのかもしれない。こう

なつたらもう、嘘をつかずに正直に伝えることくらいしか不誠実のつけを払う方法はないだろう。

しかし、やはり思春期の直哉にこの告白はこたえたらしく、話を聞いたときの彼の様子は胸が痛むほどだった。無理をしているのがありありとわかり、このまま婚姻届を出していいものかどうかためらわれたが、結局ほとんどどさくさまぎれのような形で籍を入れてしまった。

今考えたら、あのときに思いとどまっていたらよかったのだ。

あとになってから何度も思った。

その日をさかいに直哉は変わった。反抗的な態度を取るようになり、学校をさぼって行方をくらませ、しまいには泥酔状態で家に戻った。それも日付を超えた頃に。

玄関先に倒れた直哉を見てしおりは青ざめ、近寄ってすぐ感じた酒気に怒鳴り声を上げた。彼女が感情的になつているのを見たのは初めてだった。

吐きそうだと言う直哉をトイレに連れていくと、彼は酒と胃液ばかりを戻し、やがてぐったりしたまま動かなくなった。しおりは直哉をつねったり脈を取ったりし、克大はとにかく水を飲ませてと言う彼女に従ってコップを運んだ。

直哉は酒を飲むような子どもではないし、飲みたがるような子どもでもなかった。誰のせいで彼がこんなことになつてしまったのかは、問うまでもなく明らかだった。

克大は沈鬱な面持ちで直哉を介抱していたが、本当に衝撃を受けたのはそのあとだ。

服を着替えさせようと、夏服のシャツのボタンをゆるめたときである。

あらわになつた首や胸元に、鬱血のあとがあつた。白くすべらかなような肌、いくつも醜く散らばっていた。それがどういったものなのか、見たことがある者なら一目でわかつただろう。

しおりはその場におらず、克大は彼女に何も伝えなかった。しか

し彼女は落ちついてから真つ先に「もしかして女の子と変なことしてたんじゃないかしら」と疑った。女の子が電話に出たと言ったことから推察したのだろう。いや、そうでなくとも、あのときはそれを疑うのが当然だったのかもしれない。直哉の年を考えれば。

しかし、克大は直哉が女の子と一緒にいたのだとわかったときもそういう疑いを少しも抱かなかった。それどころか、鬱血を見たあともまだ信じられずにいた。克大の中で直哉はいつまでも小学生のころのかわいい子どもままであり、酒を飲んだり女の子といかがわしい遊びをするようなことは永遠にありえないはずだったのだ。  
(子どもだと思ってたのに)

食べられずにまるまる残った弁当なんかより、そちらの方がよっぽどシヨックだった。そんな自分を、あとから笑った。子どもはいつまでも子どもままではない。直哉だって男なのだから、克大がこれまで通ってきたのと同じような道をたどって大人になるのだ。

どういうわけだか苦い気持ちはおさまらず、それでもなんとか自分を納得させたが、翌々日意識のはっきりした直哉と言葉を交わして、やはり彼は変わったたりしないのじゃないかと思わせられた。

直哉はすっかり元の顔に戻っていた。そして言った。

「おれ、克大さんのこと好きだよ」

笑った顔がかわいかったから、思わずぎゅっと抱きしめた。これでもかもうまくいくだろうと思った。

しかし、直哉が再び家を出たのはそのすぐあとのことだった。

別れた方がいいと思う、と言ったのは克大の方だ。

どう考えても、そうするより他道がないように思われた。

直哉がいなくなつてから、しおりとはうまくいかなくなっていた。

警察に捜索願いを出したものの、克大の毎日は直哉を捜すことだけに費やされた。彼の携帯電話はつながらず、何度もメッセージを

吹き込んで、あてもないのに捜しまわった。

「やみくもに捜したって見つからないわよ、どこにいるかもわからないのに！」

心配と苛立ちでしおりの神経はかなり参っており、責めては謝るといふことをずっと繰り返していた。直哉が心配だ、捜したい、でも仕事がある、警察は見つけてくれない、イライラする、つい怒鳴ってしまう、だけど年下の男に八つ当たりするようなみっともない自分でいたくない。彼女の思考はそういうふうには堂々巡りをするようだった。

「直哉のことばかり優先させるのはやめてよ！」

ヒステリックにわめいたかと思ったら、

「ごめんなさい、心配してくれてるのはわかっているの。あの子のことで面倒かけて申し訳ないって思ってる」

そうやって彼女は苦しそうに謝った。

こんなこと、いつまでも続けられない。

昼を過ぎても少しも暑さのやわらがない街の中を歩きながら、克大は額の汗を拭った。

平日だというのに道は混み合っている。前に直哉と来たことのある通りだ。

行く先にまるで心当たりがないから、以前一緒に出かけたことのある街を片っ端から探すしかなかった。わかっているのは大学生と一緒にいるらしいということだけ。だからそれくらいの年齢の男女をつかまえては写真を見せて、この子を知らないかと訊ね回った。成果は全く得られていない。

無理があるのはわかっている。だけどじっとしてはいられない。

「克大？」

背後から肩に手をかけられ、克大は振り返った。目に飛び込んできたのは、サングラスと顎髭だ。

「やっぱりそうか。なんだよ、おまえ就職したとか言ってなかった？ なにやっつてんだこんな時間に」



さぼり？ と軽い調子で訊ねたのはコマだった。思わぬ出来事に、うつすらと口が開いた。

なんで、と考えかけ、そういえば彼はこのあたりに住んでいたのだった、と克大は思い出した。彼は相変わらず休日の露店でアクセサリーを売り、平日は確かアパレルショップでアルバイトをしていたはずだ。

「おー、久しぶり……。つか、さぼってんのはそっちの方じゃねえのか？」

「今日は休みなの。おまえは？ おまえも？」

「いや、辞めたんだよ、こないだ」

「え？ なんで？」

意外そうに訊ねたコマは、前から来た男とぶつかりそうになり、ひよいつと避けて克大の腕を引いた。そのまま細い路地へ入った彼は、奥の方を髭に覆われた顎でしゃくった。行こう、ということだろう。両側からビルに押しつぶされそうな窮屈な道だったが、少し歩くとビルが途切れて視界が開けた。

「で、なんでよ。友だちに誘われて入ったとか、そういうんじゃないかったっけ？ 会社」

「先輩だよ。呼んでくれたんだけど、おれ今ごたごたしててさ。迷惑かかるから辞めた」

「ごたごた？」

首を傾げ、彼は右手にある公園の中へと入ってゆく。克大も黙って従った。平日であるせいか、暑さのせいか、公園に子どもの姿はない。小さいのにながらんとしている。コマはちょうど木の影になっているベンチに掛けて煙草をくわえた。

「なにをごたごたすることがあんだよ。ガキとはうまくいってんだろ？」

「こないだまではな」

となりに座り、差し出された一本を取って火ももらう。すうつと煙を吸い込んで、ずいぶん久しぶりに吸ったな、と思った。

「うまくいかなかったのか？」

「……籍入れたんだ」

「ああ、そりやおめでとう。式やんなかったのかよ」

「やんなかった」

「せつかくなんだからやりやいいのに。……ん？ うまくいかなかったのと籍入れたのと、一体なにが関係あるんだ？」

「ナオ……彼女の子もだけど、あいつはおれと彼女が結婚すると思っでなかったから」

「コマはまばたきを止め、なんのことだかわからないという顔をした。

「おれ、お母さんの友だちだっで紹介されてたからさ」

「……わからねえか？ だいたい」

「わかんなかったんだよ、子どもだから」

「悪いことしたよなあ、と克大はひとりごち、うつむいて自らの爪先を見た。

「それで、ガキは嫌だっで駄々捏ねてんの？ あ、でも結婚はしたんだよな。結婚したのが気に食わなくてハンストしてるとか？」

「いや……」

「思い返すと気持ち沈み、口が少し重たくなった。そんなことからまだよかった。

「嫌だっで言われたことは一度もない。そういうこと言わないんだよ。ためこむタイプでさ……。で、なんにも言わないで、家出しちゃった」

「そりやあ……」

「コマはめずらしく言葉を濁した。事態が事態だけに軽々しいことは言えないと思っただらう。

「その、子どもは今いくつなんだっけ？」

「十四。中二」

「うっーん、と聞こえたのは唸り声。ふと目を向けると、彼は前のめりになって頭をくしゃくしゃ掻き乱していた。

「まあ、難しい年頃ではあるわなあ。おまえが気に入らなくて家出したってこと……なんだよな？」

克大は煙を吐き出して眉間を寄せた。

「それがけっこう複雑なんだよ。おれ、あいつが出てく直前に話したんだ。でもそんなときはすっかり元に戻ってて、このままうまくいのかなんて感じだったんだよな。すげーかわいいこと言ってたし」「かわいいってなに」

「おれのこと好きだって」

「はー、はーはー、うん？ それ本心だとしたら、なんで出てく必要があるんだ？」

「そのあと会社行かなきゃなんなくて出かけたんだけど、おれがいない間にしおりさんが父親のこと話したらしいんだよ。どうもそれがあんまりよくない話し方だったみたいで……」

「よくない？」

「まあ、言ってみれば、あれだ、本当の父親はおまえに会いたくないって言ってるんだから、新しいので我慢しろ的な」

「うわー、言われたくねー」

コマは心底嫌そうな声を出した。ぐっと眉間が寄せられ、ひどく人相が悪くなる。

「なんでそんなこと言っちゃったかね。それじゃあひねくれちゃうぜ」

事を焦ったな、と彼は呆れたように言った。

ひねくれちゃう、という部分に克大はため息を漏らした。確かにコマの言うとおり。直哉は少しひねくれてしまったようだった。素直だからこそまともに打撃を食らったのだろう。

「あのひとはあのひとで、ナオが本当の父親のどこに行くって言い出すかもしれないと思ったらこわくなっただよ。ナオは母親の言ったことそのまま受け止めて、もう話したくないってさ。一回だけ電話が繋がったんだけど、取りつく島がなかった」

「そりゃあそうだろうよ」

「だよなあ……」

くたつと首を下げたまま、頭を上げられない。声がひどく重たくなつた。

「どんだけへこんでんだよ、おまえ」

「だってさあ、死んだと思つていいと言つんだぜ。いなくなつた方がいいつて思つてんだろつて」

「うーん、いきつくとこまでいつちやつたな。で？ おまえ、思つてないの？」

「なに？」

「だから、いなくなりゃいいのにつて」

克大はぼかんと口を開けた。眉がゆつくりと歪んでゆく。

「思つわけねえだろオ、思つてたら捜さねーよ」

あー、と呻いて、片手で目を覆う。どうでもいいなら楽だつた。

「一体どうしてんだか……飯食つてんのかなあ……」

「どこにいんのか見当つかないのか？」

「わかんねー。学校さぼつたときに大学生と知り合つたらしくてさ、そいつの家にいることは間違いないんだけど。どこだか教えてくれなかつた」

「家出する気なら教えねーだろ。じゃあ、おまえやみくもに捜しまわつてるわけ？」

「一緒に遊びにきたことあるとこをな……。歩き回つて、大学生くらのやつつかまえて写真見せてる」

「写真？ 今あんの？ おれにも見せるよ」

好奇心を剥き出しにしたコマに、克大は財布の中から写真を抜いて差し出した。入学式のときに撮つた写真だ。校門の前で、直哉はどういう顔をしているのかわからないというふうに立っている。

「はー、イメージと違うな」

「どんなイメージだつたんだよ」

「中学生男子だろ？ もつとじゃがいもみたいかと思つてた」

えらいかわいいな、とコマは写真を掲げて日に透かすようにした。

かわいいんだよ、と克大はつぶやく。本当にかわいい。外見のこと  
だけではなく。

「心配だな、このツラじゃ」

コマが言ったのに、克大は首を傾げた。なにが、と訊ねたら彼は  
片眉をふつと上げた。

「人間、若いとかかわいいかいいうだけで巻き込まなくていいよ  
うな悪いことに巻き込まれたりするだろうが。いかがわしい大人に  
たぶらかされて」

一瞬意味がわからなかった。

「今、子どもだけの売り部屋とかあるって話だぜ。まったく変態の  
多い世の中だよ」

「……男なんだぞ」

「男でもさ。言っただろ、変態が多いんだって。あと、ガキの上前  
ハネるような悪い大人がさ、いっぱいいる」

ぞわつと首まで鳥肌が立った。そんなこと、考えもしなかった。

まばたきもできないでいると、コマは笑った。

「おまえやっぱりおぼっちゃんだよな。警察には？ 当然届けてん  
だろうな」

「……捜索願い出してる」

「大学生のどこか……。ま、そいつがまともで、泊まるところある  
ならそう悪いことにはなってるないだろ」

戻された写真を、沈鬱な気分で受け取った。そこに映っている直  
哉をじつと見つめる。

こんな子どもをどうこうしたいと思う人間がいるなんて、どうし  
ても想像できなかった。現実味がなさすぎる。だって、本当に子ど  
もなのだ。ただかわいくてあどけなくてすこやかな。

戻した写真を、コマは再びひょいっとなんぞ

「やっぱりこれ貸しとけよ。おれも店の客に訊いてやるから。ま、  
その年頃のガキなんて単純だから、気がすんだら案外けるっとして  
帰ってくるかもしれないけどな。帰ってきたらうまいこと言いくる

めてせいぜいかわいがってやりな」

コマの声が遠い。克大はぽつんとつぶやいた。

「おれ、離婚しようと思ってる」

まだ誰にも言っていないかった。誰かに相談するつもりもなかった。自分のことはいつだって自分で決めてきたのだ。それなのに、なんだか、急に自信がなくなってしまった。

「ガキのために？ 別れてなんか変わるのか？ おまえが嫌われてるってわけじゃねんだろ」

「んー、たぶんな……」

「なら見つかったらちゃんと説得しろよ。話せばわかることじゃねえか」

「そうだな……でも」

克大は言いよどんだ。うまく整理できていない。ごちゃごちゃしている。

「なんだよ、はつきりしねーな。おまえそんなやつだったっけ？」  
うん、とつぶやく。確かにそうだ。こんなに物事をぐだぐだと考える人間ではなかったはずなのに。どうも今回に関しては直感が働かない。

「その話、嫁さんにはもうしたのか？」

「した」

「それで、なんて？」

「考えさせてくれって」

おれたちが結婚してるのは、ナオのためにならないよ。

別れを切り出したあと、そう言ったら、しおりは疲れ果てたようにうなだれた。

ちよっと、考えさせて。

しんとしたリビングに、彼女の声はひどく重々しく響いた。

「ナオはおれを好きだって言ったけど、あの家でおれが家族になることは望んでないと思う」

「なんでそう思うんだ？」

「わかんないけどさ。おれたちが結婚してからあいつすごい荒れたし、嫌なのは嫌なんだよ、絶対。騙されてたんだっていう気持ちがあるだろうし、母親を取られた感じがすんのかな？ 他人ならうまくやれても、家族になっちゃうと駄目ってこともあるだよ」

「まあなあ。でも別れることはないだろうよ。子どものせいで別れるって、そんな、バカバカしい」

子どものせい、と胸のうちで繰り返した。なんだかそれは違う気がした。うまく言えないけれど。

黙り込んでいたら、コマは煙を吐き出して傍らの灰皿で揉み消した。

「別れたとして、どうするんだよ、おまえ。行くところあんのか。実家に戻るのか？」

「別にどこでも暮らせるけど、仕事やめたからなあ。部屋探すの面倒そうだな。実家は兄貴がうるせーし、今さら親父の会社には入りたくねーし。そもそも田舎は性に合わないしなあ」

「そんなに田舎なのか？」

「田舎だよ。山ばっかとか田んぼばっかとか、そういうんじゃないけど。やっぱりこっちは全然違う」

「あー、わかる。垢ぬけねえってことだよ。うちもそうだし、空を見て、彼は後ろ頭をくしゃくしゃ搔いた。

「ま、行くところなきやうち来いよ。死ぬほど狭いけど、一、二か月なら暮らせないこともねえだよ」

にこ、とサングラスの向こうの目が細められた。彼は気安く、面倒見がいい。

助かるよ、と克大は微笑んだ。

直哉の学校の友だちから電話がかかってきたのは、その何日かあのことだ。

菊崎という少年だった。ちょうど、直哉が家を出てから一か月くらい経った頃だったと思う。

「直哉、家に戻ってますか？」

それは明らかにおかしな質問だった。クラスメイトには直哉は入院していると伝えてあるはずなのだ。

「どういうこと？」

「入院つて、嘘でしょ。おれ、直哉と会ったんです。学校の帰り。乗り換え駅で。あいつ、家出じゃないつて言ってたけど、なんか様子が変だったから……」

受話器を持つ手がぴくつと揺れ、心臓の鳴り方が変わった。それは初めて得た手がかりらしい手がかりだった。このチャンスを逃してはいけない、とおかしなくらいに気が逸った。

「悪い、それ、どの駅だか教えてくれる？」

「じゃあ、やっぱり家出なんですか？」

答えにつまった。おいそれと口にできることではない。

「あの、おれ、口固い方です。ひとに言ったりしません」

彼はずいぶん直哉を心配しているようだった。こんな友だちがいたのか、と考えかけ、克大は「あつ」と思った。

「菊ちゃん？」

「えっ？」

「あ、ごめんごめん、ナオが言ってたなーと思って。えーと、水泳部の」

「そう、そうです。あの、ええと、お手伝いのひとですよね」

うん、と答えたら、菊崎は矢継ぎ早に問うた。

「直哉、どうしちゃったんですか？ 学校いくのヤになったとか、担任になんか言われたとか言ってたけど、ほんとはですか？ おれが、学校来いよつて言ったとき、あいつわかったつて言ったんだ。でも、全然来ないから……」

学校が嫌だなんて、そんなことを言ったのか。  
少しぼんやりしてしまった。



本当のことは言いたくなかったのだろう。直哉の気持ちを思うとたまらない。

(友だちには、知られたくないか……)

お母さんの友だちだと思っていた男が本当は恋人で、自分を騙して何年も一緒に暮らしていたなんて。

「入院してないんですよね？」

その問いかけに、今度は正直に返事をした。

「……入院は、してない。家を出たまま戻らないんだ。理由は……帰ってきたらあいつに直接訊いてやって」

電話の向こうは静かになった。追及されるかと思っただが、彼は同じことを訊ねたりしなかった。訊いたのは克大の方である。

「あいつ、どんな感じだった？ 怪我してるとか、病気してるとか、そういう感じじゃなかった？」

「そういうのはないです。いつもと変わらなかった。元氣そうに見えました。笑ってたし。ただ、髪が短くなってて、着てる服が合っ てなかった。サイズ、たぶんでかいの着てたんだと思う。あいつ、 だらしないの着ないのに」

そっか、と克大はつぶやいた。複雑な気持ちだった。元氣だったらしい、と安堵すると同時に、妙な胸騒ぎを覚えた。もしかしたら直哉は新しい生活に馴染みつつあるのではないか、それならもうここに帰ってこないのではないか。そう思ったら少し不安になったのだ。

沈黙していると、菊崎は直哉と会ったという駅を教えてくれた。

そして、訊ねた。

「帰って、来るんですよね」

もちろん、と克大は答えた。

その言葉に嘘はなかった。どんなことがあっても、直哉だけは無事で見つけて連れ戻す。そのためだけに、自分は今ここにいるのだと思っていた。

教えられたそこは、学校の最寄駅からほど近く、何度か捜しに行

ったこともある場所だった。克大は呆れ、それと同時に希望も感じた。駅が特定できただけでも見つかる可能性は高くなる。

克大はそれからその駅にへばりつき、中学生から大学生くらいの男女にしぼって声をかけた。

「もしかしたらご協力できるかもしれません」

たったひとりそう言ったのは、高校生の女の子。このあたりでは有名な名門女子校の制服を身につけていた。

変わった子だった。最初彼女は、「知らない」と言ったのだ。それなのに、引き返ってきて声をかけた。物腰のやわらかいその女の子に、克大は写真と自らの携帯電話の番号を渡した。

「わたしは葛原結衣といいます。たぶん……お電話さしあげることになると思います」

おかしな物言いをする子だと思った。物憂げに伏せた睫毛が、白い頬に濃い影を落としていた。

「それは……この子を知ってるって意味？ どこにいるか知ってるなら、今……」

「今は言えません。確かめないと」

彼女は手元の写真をじつと見つめていた。自分の知っている子であっているのかどうかを確かめる、という意味なのだ。克大は解釈した。

「じゃあ、この子が、きみ……葛原さんの知ってる子だったら、すぐに連絡してくれるかな」

彼女はうなずき、一旦背中を向けたが、再びこちらを振り返った。

「あの、この男の子、あなたのなんなんですか？」

問われて、克大は唇を薄く開いた。だけどそのまま何も言えずに固まった。

なんなんですか？

なんなんだろう。

自分と直哉との関係を表す言葉が見つからない。

戸籍の上では義理の息子、小学生のころから一緒に暮らしている、

弟のようなもの？

どれも本当のことなのに、すべてしっくりこなかった。克大が黙り込んでいると、彼女は言った。

「あなたの、大事なひとなんですか」

それでやっと、ああ、と思った。

「……うん、そう。すごく大事な子なんだ。だからはやく顔が見たい。無事なのを確かめたい」

すると彼女はなぜだかひどくかなしそうな顔をした。おかしい話だが、克大はそのときやっと、彼女がとてもきれいな顔をした少女なのだと気がついた。

軽く頭を下げて、彼女は階段を下りていった。

しおりが離婚届に判を押したのは、その夜だ。

もう他にどうしようもないのかしらね、と彼女は言った。しんと静かな夜のリビング。ほつれた髪がひどく痛々しく見えた。

他にどうしようもないのだろうか、と克大は考えた。何かが間違っているような気がした。しかし、答えを出す前に、思考はしおりの声に遮られた。

「こんなこと死んだって訊きたくなかったけど、あなた今、わたしと直哉、どっちを大事だっと思ってる？」

なんだかいつかも聞いたような言葉だ、と思った。改めて考え、克大はうつむいた。そうして、さっき考えかけていたことの答えを出す。

他にどうしようもないということはないのだ、きつと。

コマだっけって言うていた。普通はここで離婚はしない。とにかく子どもを見つけて、説得するという道を選ぶだろう。根気よく話し合えばどうにかならない問題ではない。たとえ時間はかかっても。子どもはいつか大人になる。大人の言うことを理解できる日は必ず来る。

だけど、克大はもうそれをしたくなかった。

しおりのことを嫌いになっただけではない。今だっけ好きだ。で

も、その気持ちは明らかに形を変えている。

彼女と夫婦になることで、これ以上直哉を傷つけないかった。気づいたら、その思いが強くなっていた。

しおりと別れることで直哉を楽にしてやれるのなら、彼女との生活はなくてもよかった。

我ながら最低だ。自分に驚く。

「……ごめんね」

その一言だけで、しおりは納得してため息を漏らした。

「いいのよ。お礼を言うのは変だけど、母親としては感謝してる。直哉をかわいがってくれてありがとう」

「これでいいって、本当に思う？」

訊ねたら、しおりはちよっと笑った。そして小さく「ええ」と答えた。

「わたしもやっぱり、あなたより直哉のことが大事みたい。あの子にかわりはいないから」

かわりがいないという、その気持ちが不思議なくらいよくわかった。

しおりはそこで、口を覆って声を震わせた。

「本当に帰ってこなかったらどうしよう。なにかひどいことになってたら……」

ぼた、ぼた、とテーブルクロスの上に涙が落ちた。彼女ももう限界だった。

「大丈夫だよ。絶対見つかる。ナオの友だちが、元氣そうだったって言ってたじゃない。自分で外にも出てたんだし。それに、さつき言っただろ、高校生の女の子。あの子が電話くれるかもしれない」  
向かいからとなりに移り、彼女の肩を抱いてなだめた。そうしながら、やはりもう元のようにには戻れないなと思った。

お互いの気持ちは、男と女という部分を完全に通り過ぎてしまっていた。

葛原結衣からの電話は、その翌日にかかってきた。

「直哉くんを迎えにきてあげてください」

開口一番、彼女は言った。

「じゃあ、きみの知ってる子が……」

「鈴木直哉くんです。わたしの従兄のところに行きます」

「従兄？ あの、ナオはどうしてる？」

「元気ですよ。あそこにいるの、もう慣れてしまったみたい。でも、直哉くんはやっぱりおうちに帰った方がいいんだと思います」

そりゃあそうだろう。中学生がいつまでも他人の家に引きこもっていいはずがない。

「わたし、今駅にいるんです。これからでよかつたらお連れします

けど、ご都合は……」

「今から行くよ、すぐ」

「じゃあ、西口のカフェで待ってます」

電話を切り、時計をちらりと見た。まだ昼前、十一時を少し回ったところだった。

しおりはもちろん仕事 중이다。それに、これで本当に直哉に会えるかどうかわからない。連絡するのははっきりしてからの方がいい。

克大は駅へ急いだ。

そして結衣と合流し、連れて行かれたマンションで、本当に久しぶりに直哉の姿を見た。

菊崎の言ったとおり、髪が少し短くなっていた。

「か……つひろさん」

驚愕の表情を浮かべた直哉は、どこか怯えているようにも見えた。やっと見つけた。その瞬間にこみ上げてきた気持ちをなんと言うていいかわからない。

とにかく、もう離したくない、と思った。つかまえて家に閉じ込めたかった。誰かに対してあんなふうに思ったことは一度もない。

これからもきつとないだろう。

ソファに座りこんでいる彼の腕をつかみ、立たせたが、その体はびくつと震えた。視線が反れたときに、克大は自分が拒まれていることを知った。直哉は結衣の従兄の方へ目を向けたのだ。まるで助けを求めるように。

それに気づいて、初めて彼の姿を確認した。結衣の従兄で、おそらく直哉の言っていた大学生。

えらくきれいな顔をした男だった。ひとなつこそうに笑った彼は、森園千尋という名前なのだあとから名乗った。

「帰ろう」

あの家で、何度そう言ったかわからない。だけどとうとう直哉はうなずかなかった。

「ここにいたい」

震える声でそう言って、彼は千尋の影に隠れた。

克大はまばたきを忘れた。

今までずっと、心のどこかで、見つけさえすれば直哉は自分の元へ帰ってくるだろうと信じていたのだ。それなのに。

たった一か月がいろんなことを変えてしまったのか。

衝撃に息を飲み、やがて克大は小さくため息を漏らした。

（仕方ないな）

自分が考えなしだったことに対する、これが報いなのだろう。

無理やり連れて帰ったってどうなるものでもない。これは千尋の言葉だが、確かに彼の言うとおり。

直哉を連れ帰るのは自分でない方がいいのだろうと思った。けど、離婚した、と今伝えるべきなのかどうか迷った。迷った結果、言わずにおいた。言えば直哉はきつと複雑な思いを抱くはずだ。

居場所は確かめた。あとはしおりに任せて自分はさっさといなくなるのが一番いい。母親とふたりで暮らしていたところまで時間が戻れば、直哉も楽になるだろう。

さらりとした髪の毛を、久しぶりに撫でた。たった一か月の間に、

彼はずいぶん痩せてしまったように見えた。髪を切ったせいかもしれないし、少し背が伸びたのかもしれない。

「ごめんな、と言ったとき、これが別れになるだろうと思った。だけど、意外にも直哉はその夜家に戻った。」

「帰りたい、という電話を、受けたのは克大だ。」

「迎えに行きたい気持ちを押さえ込み、たいして多くもない荷物を黙々と片づけた。もしも直哉から電話がなくても、翌日にはしおりが千尋の家に行くことになっただろう。出ていくことは、もう決めてしまっていた。」

「言葉を交わさずに別れた方がしあわせだったかもしれない。」

「さみしさが胸に穴をあけるような、そんな感じを生まれて初めて味わった。」

しおりの家を出てからは、住むところも仕事も転々とした。

最初に転がりこんだのはコマの家である。来い、という言葉に甘えた。

とりあえず仕事をしなければとフラフラ探し、そのときちょうどアルバイトを募集していた近所の美容院で働くことになった。免許を持っていないから、もちろんカットなんかはできない。受付、電話応対、チラシ配り、レジ打ち、あとはシャンプーと時間つなぎのマッサージ。やってみるとなかなかおもしろく、会社づとめよりは自分にあっているような気がした。客の大半が若い女の子で、話すことと言えば仕事や彼氏の愚痴なのだが、そういうのを聞くのが楽しかった。ひとと話している間は、いろんなことを忘れていられた。「クーラー直さねーの？」

風呂上り、扇風機の前で、克大は先住者である友人に言った。

もう夏の盛りだというのに、コマの部屋のクーラーは壊れてぴくりとも動かなかったのだ。

ワンルームの古くて狭い家は夜でも蒸し暑く、プライバシーなど当然存在していなかった。部屋の中だけの話ではなく、外の廊下に面したドアをいつも開け放していたため、隣家との境目すら曖昧だった。

「金がねーよ。自分でやってみよかな」

「やめとけよ、素人は分解しちゃ駄目なんだぜー、電化製品」

「ある日突然直らねーかなー」

シャワーですっきり流したそばから汗が噴き出る。風呂から出たばかりのコマは、髪をぐしゃぐしゃぬぐいながら克大を押しつけた。「あっちいー」

ごろん、と剥き出しの床に転がると、傷だらけのそこはほんの少しひんやりしている。玄関の方、キッチンの方が一番涼しい。冷た



い板に頬を押しつけて目をつむる。こういうとき、頭に浮かぶのはいつも直哉のことだった。

もう一か月近く経とうとしているのに、少しも薄くならない。

「おまえまた別れた女のこと考えてるな」

じつと動かずにいると、後ろでコマが言った。正確には違うのだけれど、克大は答えない。

あの家にいた最後の夜、直哉はひどく辛そうに泣いた。

……好きだよ、でも、家族にはなりたくなかったんだ。

その言葉に、彼の苦痛のすべてが閉じ込められていた。

うなだれたうなじの細さが痛々しく、克大はどうにもできずにただすべらかな肌を手のひらで撫でた。

「だからさ、子どものせいで別れるなんてバカらしいっておれが言っただろうが」

カシ、カシ、とライターの石を擦る音が聞こえる。

「子どものせいじゃないんだって……」

頬を床につけたままもごもご言った。

「子どもが嫌がるから別れたんだろ？　子どものせいじゃねーか」

「うーん……」

そうじゃなくてさあ、とうめく。眉が寄った。

「おれ、あいつのことすごいかわいくってさー。彼女のことよりナオが大事だと思っちゃったから駄目になったんだと思う……」

「大事？」

「もうしんどい思いさせたくなくて別れたんだけど、泣いてたなあ、最後」

克大はため息をつき、コマは沈黙した。いつまでたっても何も言わないのを不思議に思って寝返りを打ったら、彼は固まって口元をひくつかせていた。

「おまえ……年増好きだと思ってたら、そういう気もあったのか」

「そういう気？」

「それは世間的に問題あるぞ。熟女はいいけど少年はやめとけ」

克大はぼかんと口を開けた。

「なんていうんだっけ？ ロリコンとは違うんだろ。少年愛ってやつ？」

想定外の言葉に目をみはった。まさかそうくるとは。

「バカ、んなわけあるか」

「だって父性愛にしちやいきすぎてるだろ。うん、いきすぎてるな。だいたい自分の子でもないのにそんなにかわいく思えるもんか？」

普段なら笑って流すところだが、克大はめずらしく真剣にへこんだ。

胸のあたりがもやもやする。直哉のことをそういう目で見ること自体、考えられないと思う。しかしその反面、彼に対する複雑な気持ちに自分でも名前をつけられないでいる。だからやもやしてしまっただ。

「そういうんじゃないんだって、マジで」

我ながら声が重たい。かなりのダメージを受けている。

「違うっつーなら、さっさと忘れて誰かに自分の子ども産んでもらえよ。そしたら忘れるだろ、しよせん他人の子なんだから」

自分の子ども、と胸のうちで繰り返した。

なんだかしくくりこない。自分の子どもが欲しいなんて思ったことは一度もなかったし、今も思わない。それとはまた別なのだ。

(ナオだからかわいかった)

考え、子どもじみていると自分で呆れた。まるで、お気に入りのぬいぐるみを抱きしめてこれじゃなきや嫌だ捨てたくない駄々を捏ねているみたいじゃないか。これを言ったらコマはますます邪推するに違いない。

克大は答えず、ごろごろと部屋の真ん中まで転がって煙草を吸った。

「なにっただっだしてんだよ。なんかおれの言ってることおかしいか？」

「いやー……、正しいよな、うん。どの道もう会うこともないんだ

し……」

口に出したらせつなくなつた。直哉にはもう一生会えない。誰に確認しなくても、それは決まりきつたことだつた。

「……写真くらい、もらつてくればよかつたかなあ……」

ふうつと煙を吐きながら言つたら、コマはくるつとこちらを振り向いた。

「あるよ」

「え？」

「そついや、預かつたままだつた。一枚借りただろ」

「ああ……」

コマは部屋の隅に放置してある雑誌の山をごそごそさぐつた。

「おー、あつたあつた。悪い、ちよつと端が折れた」

差し出された写真を目の前にかざし、そこに写る直哉を見た。

そして、こりやあ駄目だと思つ。写真なんかあつたらますます駄目だ。辛い気持ちが煽られる。

ふと瞼の裏に浮かぶのは、別れる夜、うなだれて泣いた直哉の姿。しおりとの生活の記憶が薄くなつても、彼のことだけがいつまでも忘れられない。

どうしてだろう。

ふ、と考えかけ、眉間を寄せた。煙が目にしみただけでなく。

(いやいやいやいや)

変な方向へ思考が流されそうになっている。

それは違う。違うというより、あつてはならない。

胸の中で打ち消し、克大は言つた。

「おれは女の子が好きだ」

「なんだよいきなり」

コマは弾かれたように笑つた。

「でも、そうなんだ、うん」

ひとりごち、もやもやするものを全部振り払う。

今でも直哉が気になるのは、やはり自分の子どものように思つて

いたからなのだ。

一刻も早く彼女を作ろう。それがいい。  
そうしたらきつと、何もかもきれいに忘れてしまっただろう。

\*\*\*

コマのところには、三か月もいなかった。

あのあとすぐに恋人ができ、克大は適当な住まいを見つけて移り住んだのだ。しかし、彼女とそこで暮らしたのは半年と少し。それでもまだ持った方で、次は二か月で破局を迎えた。短い周期で別れてはつきあう、それを繰り返していた。誰かがいないと駄目だった。何人も彼女がかわったけれど、結婚したいと思っただことは一度もない。自分の子どもがほしいとか、家庭を持ちたいとか、そういうことも考えなかった。

そのくせ、女の子に親切にすることは忘れないのだ。そうしていなければいけないような気がしていた。もともと女の子は好きな方だったが、離婚して二年くらいの間は、そういう気持ちにガチガチにとらわれていた。

久しぶりに姉から電話がかかってきたのは、ちょうどその頃である。

夫と共にアメリカへ渡っていた姉が離婚し、日本に帰ってきて再婚したことは知っていたが、まだ直接連絡を取っていなかった。

「久しぶり、元気にしてる？」

何年かぶりに聞いた姉の声は、若い頃とあまり変わっていないかった。確かもう四十は過ぎてはいるはずなのだけだ。

「元気だよ。姉さんは？」

「わたしもなんとか落ちついたわ」

「旦那さんとうまくいってんの？」

「まあね。前よりはずいぶんしあわせかな」

「そう。よかつたじゃん。秋人は？ どうしてんの？ 一緒に帰ってきたんだろ？」

姉はそこでほんの少し沈黙した。

「バタバタしててあの子も大変だったんだけど、春からそっちの大学に行くことになったのよ。それで、克大にちよつとお願ひがあるんだけど」

「うん？」

「あの子ね、今そっちのマンションでひとり暮らししてるの。受験の少し前から……。きちんと生活できてるって本人は言うんだけど、ひとりじゃなにもできない子だから心配なのよ。わたしが行くって言っても来ないでいいって言っし。悪いんだけど、あなたちよつとどうしているか見てやってくれない？」

「マンションで一人暮らしって……」

「主人の持ち物なの。仕事用の部屋だったんだけど、もう使わないからって、秋人に」

「ああ、そっか。いいよ、どのへん？ 秋人の携帯も教えといて」

「ありがとう、助かるわ。あの子にもよく言っておくから」

マンションの住所と電話番号を聞きながら、それでは意味がないなと思つたが、言わずにおいた。姉が心配しているのは息子の健康状態であり、素行ではないのだ。信用しきっている。克大の方でも、秋人が母親に知られて困るようなことをしているとは思わなかつた。

実際、仕事終わりに教えられたマンションに赴くと、秋人はちやんとそこにいた。久しぶりに会つた彼はずいぶんと変わっており、そちらの方に克大は驚いた。芋虫が蝶、とでも言うのだろうか。

まるつと太っている頃からかわいくはあつたのだが、脂肪が落ちて初めて自分の甥がかなりの美形であることを知つた。黙つていても女の子が寄ってくるような。

「久しぶりです、克大叔父さん」

ニコツと笑つた顔はしかし、本心が見えないという点で昔とあま

り変わらなかった。相変わらず礼儀正しくて、品がよくて、穏やかでにこやか。

だけど、子どもの頃とは明確に変わった部分があった。あの頃曖昧でよく見えなかった、彼の中の影の部分が、今はくっきりと浮き出ている。両親の離婚がこたえたのだろうか。

(それとも、再婚の方かな……)

自分の過去と重ね合わせ、ほんのわずか苦い気持ちになったが、克大はそれを押し隠した。

「久しぶり。ずいぶん変わったな」

「よく言われます。どうぞ」

入ってみてまず思ったのは、フローリングがくすんでいる、ということだ。リビングに通され、ソファに腰かけて、ふと目がいったのはテーブルの側にあるマガジンラック。

「姉さんから、おれが行くって連絡あったか？」

何か出してくるつもりなのか、秋人は台所に入っていきながら「はい」と答えた。

「そっか」

それで、慌てて戻ってきたってわけか。

大学生がひとりで住むには広すぎる部屋を眺め直し、克大は思った。

よくよく検分するまでもなく、普段人間が生活している部屋でないことは明らかだ。電気スタンドやテレビ、リモコンにとどまらず、部屋のどこもかしこも埃っぽい。そのくせ整えられすぎていて、そして、マガジンラックに突っ込まれた新聞の日付は一か月以上前のもの。雑誌にも埃が積もっている。

顔色を見ると健康に問題はなさそうだ。これは、素行の方を心配した方がいいだろう。

克大は出されたコーヒーに口をつけた。インスタントだというのに泥のようにまずい。一口で遠慮し、まずそうに飲む秋人の分も奪って淹れ直した。

「叔父さん、上手ですね、コーヒー淹れるの」

「これが普通だ。豆から挽いたわけじゃあるまいし」

ふ、とため息を漏らす。料理をしている痕跡どころか、台所にはフライ返しひとつ見当たらなかった。

「秋人、おまえ、ここに住んでないだろ」

単刀直入に言うと、秋人は一瞬驚いたように目をみはり、すぐにニコツと微笑んだ。

「わかりました？」

多少は慌てるかと思っただのに、彼は少しも動揺していない。開き直ったというのとも違う。

「住んでないんです」

しれつとしてコーヒーに口をつけた彼の、カップを運ぶ手の動き方がやわらかだ。

「なんで。せつかくこんないいマンション借りてもらって」

その問いに秋人は沈黙した。

答えは得られそうにないかと察して、克大は質問を変えた。

「じゃあどこに住んでんだ？ 友だちのところにでもいんのか」

「友だち……」

カップを離し、秋人はつぶやく。

視線が床に注がれ、動かない。笑みが薄れ、その下に隠れている冷たい表情がかすかに浮かび上がった。剣呑な雰囲気だ。なにか危うい。得体の知れない暗いものが彼の中に巣食っている。

克大は眉をひそめた。どうした、と訊ねようとしたが、それより先に秋人はぱちつとまばたきして上向いた。そこには元通りの微笑みが浮かべられている。さっきのは勘違いか、と首を傾げたくなつた。

「友だちはいません」

「ああ、そつかまだ学校はじまってないんだっただな」

くす、と彼は吐息を漏らすように笑った。どうして笑ったのかは知らない。

「……女のひとのところにいるんです。母には内緒にしてもらえませんか」

「だいたい想像していたことではあったが、正直に告げられると少し困った。」

「この年の男なら彼女と一緒に住んでいたってそうおかしいことはない。だけど姉はそれを知ったらひっくり返ってしまうだろう。かと言って克大は秋人に説教できるような生き方をしておらず、姉に黙っていることもできそうにないのだった。」

「内緒つつつてもなあ……」

「叔父さんだってお祖母ちゃんに言えないようなことがひとつくらいあるでしょう」

「それを言われるときつい。ひとつではすまない。それに、実はしおりと離婚したことをまだ実家に知らせていなかったのだ。滅多に連絡を取らないし、バレるまでは黙っていようと決めていた。」

「うーん」

「答えに困ってくしゃくしゃと髪を掻き乱した。」

「わかってしまった以上、姉に言わないでいていいものかどうか。」

「年が離れている分、秋人の母親には子どもの頃ずいぶんかわいられたし世話になっている。心労をかけたくないと思うし、つつがなくしあわせでいてほしい。」

「（ん？　じゃあ、むしろ言わない方がいいのか？）」

「息子が元気かどうかということだけを気にしている姉に、わざわざ素行のことまで告げ口する必要はないのかもしれない。」

「別に悪いことしてるわけじゃないしな」

「恋人がいることも、その家で暮らしていることも。考えてみれば取り立てて悪いことではない。結婚するわけじゃなし、克大だってわざわざ母親に報告したりしないだろう。」

「そうですよ」

「秋人はにこっと微笑んだ。」

「学校が始まれば勉強をおろそかにするつもりはないし、母をかな



しませるようなことはしません」

「それ、約束できるか？」

「できますよ」

秋人は簡単に言い切った。まあそうなのだろうとあっさり納得し、ただどこいつは一本本当に恋愛なんかしているんだろうかと不審に思った。そういう顔をしていないのだ。彼女と一緒に暮らして毎日楽しい、という感じに見えない。どこか淡々としている。

「おまえさ、姉さんが再婚したこと、どう思ってたんの？」

ふと気になって訊ねたら、秋人は驚いたような顔をした。

「どうしてですか？」

「いや……ちょっと気になって」

言葉を濁すと、彼は目元をやわらかくゆるめた。

「そう言えば、叔父さんは子どものいるひとと結婚したんですね」

「ああ、そうだよ」

「その子はどうなんです？ お母さんの再婚をどういふうに思ってるんですか？」

克大は沈黙した。どういふうにな……。問いを繰り返すと、苦い気持ちになる。

「ぼくは、母がしあわせならいいと思ってますよ。親元を出た今は、自分にはほとんど関係ないことだし」

「さみしいこと言うなよ。関係ないってことはないだろ」

「でも、実際そうだから」

「どいつもこいつも、と思う。直哉もあるとき、おれが口を出すことじゃないと言った。」

でもそうじゃないだろう。

そう言いかけて結局飲み込み、かわりにため息を漏らした。

「ま、いつか」

からりと言い、伸びをする。関係ないと言われた時点で、扉は閉ざされてしまったに等しい。

「姉さんには元気だったって伝えとく。なんか困ったことあったら

電話してこいよ」

「ありがとうございます」

さほど心配だと思わないのは、彼がもう大人の男の部類に入っているからだろうか。しかし、大人と子どもの境目というのは一体どのあたりなのだろう。

「秋人、おまえいくつだっけ？」

「十八です」

「そっかあ……」

ポケットの煙草をさぐりかけたが、この家にはたぶん灰皿がない。

「十八じゃ、少年のうちには入んねえな」

「そうですね」

「でも大人じゃないよなあ」

かと言って家に閉じ込めておかなければと思うほど心配でもない。結局、年齢は関係ないのだろう。問題は相手が誰かということなのだ。

「なんですか、さっきから」

「いやー、なんでもない」

立ち上がり、無意味に彼の肩をパンパン叩いた。

「じゃ、おれ帰るわ。彼女と仲良くな。それで、姉さんを泣かすよ。うなことは絶対すんなよ」

最後に念押ししたら、秋人はにっこりしてうなずいた。

しかし、それから何年も秋人から電話がかかってくることはなかったし、こちらから様子をつかがいに行くこともなかった。そのときは、彼が会社を興すことも、自分がそこに呼ばれることも、まるで想像していなかった。

次に会ったとき彼は立派な大人になっており、見え隠れしていた薄暗い何かはどこかへ消えてしまっていた。

しおりとは、別れてから一度も連絡を取らなかった。

だから、そのとき会ったのは本当に偶然だったのだ。

友人の見舞いに訪れた、その帰り。克大くん、と声をかけられて振り返った。

「……しおりさん？」

驚きに一瞬まばたきを忘れた。外来の待合スペースに、白衣を着た彼女が立っていた。

「久しぶり」

いるはずのない彼女は、そこで少し首を傾げた。離婚からもう八年。だからもちろん前のままとはいかないけれど、それでも彼女に老けたという表現は似合わなかった。

「久しぶり……、ここで働いてんの？」

「そうよ。あなたは？ 診察？ お見舞い？」

「見舞いだよ。あの病院やめたんだね」

「さすがにね、直哉のためによくないかしらと思ったから」

直哉、という名前に、胸がじわっと熱くなった。こみあげてきたのはなつかしさだ。

「ナオ、どうしてる？」

しおりは微笑み、「行かない？」と外を指さした。そして、これから休憩だという彼女と一緒に、病院の側のカフェに入った。

「あなた、今、小夜子ちゃんと同じ会社にいるんですって？」

カフェラテを両手で包み込み、しおりは言った。店内は暖房であたたまっているのに、少し肌寒そうに肩を縮めて。

克大の眉尻は自然と下がる。小夜子というのはしおりの年下の友人で、結婚する少し前に紹介された女の子だ。当時彼女はまだ高校生で、何度か三人で食事をしたことがあったけれど、しおりと別れてからはまったく縁がなくなっていた。

「そうそう、びっくりしたなー、小夜子ちゃんが来たときは」

甥の秋人が興じた会社は、すぐ駄目になるだろうという克大の予想に反して持ちこたえ、少し規模を広げるまでになった。事務所を大きくしよう、という話になったときに秋人が連れてきたのが小夜子だったのだ。彼女は秋人の大学の先輩で、けっこう長く一緒に暮らしていた相手でもあるらしい。

小夜子の顔を見たとき克大は驚いたが、彼女の方は驚きよりも嫌悪を強く表に出した。

「大変だったんじゃない？ あの子わりと直情型だから」

「完全に嫌われてるよ。どういうことになってんのかな、おれ。小夜子ちゃんの中で」

「わたしがあまり説明しないから誤解してるのよ。あなたに若い女ができて、わたしが捨てられたんだと思ってるみたい」

「コーヒーに砂糖を入れながら、克大は目をまるくした。

「そんなことになってんの？」

「そうは言わなかったんだけどね。ただ、わたしに関心がなくなっちゃったんだから仕方ないのって言っただけ」

「それは……うーん……」

正しいような、間違っているような。

「まあ、おれのせいだっことは確かだから、仔細はどうでもいいのかな」

「そうよ、どうでもいいのよ。子どもに負けたなんて絶対に言いたくないわ」

だから嫌われといてちょうだい、としおりは冗談めかした。年を経たせい、昔より表情がやわらかい。

「それで嫌われてんのかー。小夜子ちゃんはしおりさん好きだからなあ……」

「あの子はいくつになっても潔癖なのよ。十代の頃よりはましになったけど、根本的なところは変わらないわね。直哉なんか、あれほど難しかった子が、今はずいぶん適当にやっってるっていうのに」

「適當？」

「そ。親のわたしが言うのもなんだけど、あの子繊細なところがあつたでしょ。でも、だいぶ大雑把になつて、人当たりもよくなつたみたい」

「へえ……。想像できないな」

「たぶんあなたみたいになりたいんじゃないかしら」

「え？ おれ？」

「ええ」

思つてもいないことに戸惑つた。

あんなふうになりたいなんて思つてもらえないような人間ではないし、こんなふうになつた直哉を想像できない。克大の中で、直哉は中学生のまま時間を止めている。詰襟姿で、困つたような表情で、校門の前に立つ、あの写真の中の彼のまま。

「おれみたいに素行が悪くなつたんじゃ、お母さんは心配だね」

しおりはふふつと声を立てて笑つた。

「そういうところは知らないもの、あの子。あなたいいお兄さんだつたでしょ」

「そうかな……」

「そうよ。ま、なにせよ明るくなつてくれたのはいいことだわ」  
克大はしおりに断つてから煙草をくわえた。

「じゃあ、元気でやつてんだね」

「元気よ。あれからずーつといい子だしね。わたしは相変わらず忙しくつて、やつと帰つてきたあの子を結局ほつたらかしにしてたけど、夜遊びひとつしなかつた」

「しなかつた？」

「高校卒業してからは知らないの。一人暮らししてるから。学校に近いとこに住みたいって、あつさりしたものよ。バイトして、なんでも自分で決めちゃつて。月々の仕送りはしてるけど、足りないつてねだられたこともない」

直哉らしい、と思う。彼は母親をあてにしない子どもだった。何

か欲しいとねだっているところを見たことがない。甘えるのが下手なのだ。

「今、大学？　じき卒業だよな。……いや、医学部はあと二年あるのか？」

「卒業よ。医学部には行かなかったから」

「行かなかった？」

「わたしはどうしても医者になってほしかったけど、医者だけは嫌だって言うの。死んだってなりたくないって」

「めずらしいね、そんなに嫌がるって」

「ほんとにそう。まあ、言えるようになっただけいいのかもね。大げんかしたけど、結局好きなようにしなさいって言ったのよ。また家出されたらたまらないわ」

今度はきつと帰ってこないから、としおりは気だるげにつぶやいた。

「じゃあ、もう就職は決まってるんだね」

煙を吐き、コーヒーに口をつける。

気楽な気持ちで言ったのだが、しおりの眉はゆっくりと寄せられた。

「なに、決まってるじゃないの？」

「たぶん」

「たぶんってどういうこと？」

しおりは困り顔で口ごもった。しかし、じつと黙って待っている。と、うつむいた彼女は覚悟を決めたように言った。

「翔太くん覚えてる？」

「翔太……？　ああ！　うん、わかる。あの、ゲームの下手な」

「そうなの？」

「そうなの。翔太がなに？」

「この間ね、家の近くで久しぶりに会ったのよ。それで、まだ直哉と会ったりしてるのって聞いたら、ときどき遊ぶよって言うから、あの子の様子訊いてみたの。そしたらね、就職とか全然考えてない

みたいだって言うのよ。バイトかけもちして忙しそうなんですって。まさか学校に残るつもりなのかしら」

「なんで翔太にそんなこと訊いたの」

「だって、直哉は家に帰ってこないし、電話してくるでもないんだもの」

「自分から電話すればいいのに」

「なんだかこわくて」

「こわい？」

「干渉するのがね、こわいのよ。情けない話だけど」

「うーん、と克大は小さくうめいた。このひとも相変わらず不器用だ。母親なんだから子どもに遠慮する必要はないのに。直哉が家出した頃にあつたさまざまのことがまだ響いてるのだろう。」

「ちゃんと訊いた方がいいよ。お母さんなんだからさ。子どもをこわがってどうすんの」

「頬杖をついて、「ね」と笑う。すると、しおりはかすかに安堵したような表情になった。」

「そうね……」

彼女を見つめ、なつかしいなあ、と、克大は胸のうちでつぶやいた。

こうしてまた誰かと直哉の話をする日がくるなんて思わなかった。ここ何年か、名前を口にしたこともない。「会いたい」と思うのが嫌で、たった一枚だけ手元にある写真は引き出しの奥に押し込めたまま。もう何年も前の話だ。いくらなつかしんでも会えないということにはわかっていた。

「だけど、こうやって直哉の母親であるしおりと再会し、彼のことを話していると、どうしようもなく顔が見たくなってくる。考えないようにしていた分、気持ちがちと押し寄せてきて苦しいほど。」

「一体、どんなふうになったのだろう。」

「久しぶりに顔見たいな」

口に出したら、もう我慢できなくなつた。会いたくて会いたくて

たまらない。

「そうだ、もしまだ就職決まっていなかったらさ、うちに来なよ」  
思いついてしまうと、とにかく一直線。悪い癖だ。展開のはやさについてこれないのか、しおりはいそがしく目をしばたかせた。  
「面接っていうか、見学っていうか、一回会社に来て、ナオが働きたいって思ったら入社ってことでさ」

「それは……そうだったら安心だけど、大丈夫なの？」

「平気。おれが人事任されてるもん」

「そうじゃなくて、あの子、役に立たないかもしれないわよ」

「大丈夫でしょ。ナオは賢いし、しっかりしてるから」

しおりは少し考えるように首を傾けた。

「そう……、そうねえ、ちょっと試ってみようかしら」

「ほんと？　じゃあさ、おれの話はまだ話さないでよ」

「どうして？」

「だってその方がびっくりしておもしろいだろ」

しおりの目がまるくなる。そして彼女はあきれたように眉を下げ、息を漏らした。

「あなたって相変わらずなのねえ。少しは大人になったかと思ったけど」

その言葉に、克大は声を立てて笑った。

\*\*\*

八年前の自分と今の自分と、そう変わっているとは思えない。

二十五が三十三になったところで、外見に明確な違いは見られないのだ。せいぜい徹夜が厳しくなるくらいで、背が伸びるでもなければ見てわかるほどしわくちやになるわけでもない。頭の中だっておんなじだ。



自分があまり変わらないから、相手のことも同じように考えていた。

しかし、十四才から二十二才までの八年は、同じ八年でも意味が違う。

会議室の扉が開き、入ってきた直哉を見た瞬間、頭の中が取り散らかった。そして、八年という時間の長さを改めて思い知った。

そうか、こんなに大きくなったのか。

驚いている彼に「久しぶり」と告げながら、克大は深い感慨に浸った。変わると言うなら甥の秋人の方が大きく変わっていたのだが、彼と再会したときとはまったく違う、ある種の感動を覚えて胸がじんと熱くなった。

くるんとしたつり目はそのまま。背が少し伸び、体つきはあの頃よりずつとすっかりしている。スーツなんか着るようになったのか。二十二と言えば、自分が彼と出会った年だ。そう考えたら、年よりは幼く見える。大きな目のせいだろう。

「大人になったなあ。見違えたよ」

正直な気持ちを口にしたら、直哉はうんざりしたような表情になった。

「八年も経てばね。あんたはオツサンになった」

生意気な口をきくのがおかしかった。自分の子でもないのに、もう立派な大人になった男をこんなにかわいいと思うものだろうか。つまらなそうにつんとされても憎めない。

話し方に、表情に、昔の面影が見え隠れした。そのたびに、一緒に過ごした三年間が頭をよぎった。たった三年。離れていた期間よりずっと短い。けどいろんな思い出がつまっている。遊園地に行ったり、海に行ったり、テニスをしたり、誕生日には馬鹿みたいに大きなプリンを作った。彼がそれを好きだと知っていたから。

「おれ、もう帰っていい？ 入社して四月からでいいんでしょ」

面倒くさそうに話を切り上げ、出て行こうとする直哉を、引きとめてしまったのはどうしてだろう。彼は入社を決め、だから四月に

なれば嫌でも顔を合わせることになる。それなのに。

呼び止めてしまった。まだ行かせたくなかったのだ。

「ナオ」

ドアを開けようとしていた彼は、ノブを押す手を止めた。だけど振り返ることはしなかった。

「……なに」

無愛想な声だった。何を言おうという考えもなかった克大は、なんとなく問いかけた。

「プリン、今でも好きなのか？」

ついさつき、プリンのことを思い出したからだ。

口に出してみるとますますなつかしい。

塾の帰り、直哉がコンビニでプリンを買って帰るのを見て作ってみた。ほんの気まぐれ。

はじめて彼をいとしく思ったのは、それを食べるのを見たときだった。おいしい、でも言えない、という顔をしていた。不器用で、そのくせ正直で、とてもかわいかったのを覚えている。

「すごい好きだよ。毎日食べてる」

やっと振り返った直哉は、打って変わって明るく笑った。

食べ物好みは変わらないものなんだな、と克大は微笑ましく思った。彼の口調が少し子どもっぽかったせいもあり、気持ちが悪くない。

名前を呼ばれたのはそのときだった。

「克大さん」

驚いて一瞬言葉が出ず、体はぎくつと固まった。ただ自分の名前を呼ばれただけなのに。

あまりにも久しぶりだったせいだ。そういうふうには呼ぶのは直哉しかない。小さい頃の直哉にしか呼ばれたことがなかった。かすかな違和感があったのはそのせいだろう。当然のことだが、あの頃とは声が違う。

直哉はにこつと微笑んだ。その笑みが、克大の目にはひどく妖艶

に映った。

(なにを……)

自分に戸惑った。そんなわけはないじゃないか、と。

「おれはもう、二十二なんだよ」

見慣れない笑みを浮かべたまま、直哉は言った。

克大はかすかに喉を鳴らした。声や言葉にどことなくまめかしいものが含まれてるように感じたからだ。

だけど、そんなのは気のせいに決まっている。

強く自らに言い聞かせた。それなのに、一步距離をつめた直哉を見つめたまま動けなかった。何かおそろしいものが近づいてきたときのよう。ただじつと息をつめていた。

なぜそんなふうになったのかわからない。

触れるほど近くに直哉がいる。それを不思議に思った。同時に危ういものを感じてもいた。しかし避けることができず、気づいたら唇が重なっていた。

感触がどうだったかなんて覚えていない。頭の中が真っ白になった。たかがキスに。

なんで、と胸のうちで問うた。口に出さなかったのはどうしてだろう。出さなかったのではなく、出せなかったのかもしれない。

「オッサンをからかうなよ」

考えるよりもはやく口は適当な言葉を紡ぎ出した。たぶんとっさに逃げることを選んだのだ。

直哉はうんざりしたような顔をした。

「やるんじゃないかった」

吐き出されたのは深いため息。彼は軽く手を振った。小さな子どもがするように。

「じゃあね」

唇がぴくりと動いたけれど、声が出ない。一体、何を言うつもりだったのだろう。

直哉はかまわずに部屋を出た。反応の遅れた克大が追いかけたと

き、彼はもうエレベーターに乗ろうとしているところだった。

「ナオ！」

呼びかけは届いただろうか。届かなかったかもしれない。もしも彼が振り向いたとして、一体何が言えただろう。何もわかっていないのに。

会議室の前でぼんやりと立ちつくした。

さっきのあれは、なんだったんだ。

ぺたんと壁に背をつけて、閉じたエレベーターの扉を見つめる。

からかったのか？ もう大人なのだとわからせたかった？ あん

なやり方で？ まさか、そんな馬鹿なこと。

「大島さん」

不意に名前を呼ばれ、克大は柄にもなくぎくつと肩を強ばらせた。振り返ったら、後ろに小夜子が立っていた。とっさに返事もできずにいると、彼女はいぶかしげな顔をした。

「直哉くん、どうでしたか？」

問われ、ふつと現実を引き戻された。

「ああ……。来るって言ってたよ」

「本当に？」

小夜子は形のいい眉を上げ、目をみはった。

「嘘についてもしょうがないでしょ」

克大はやつと目元をゆるめた。彼女という第三者が来てくれたおかげで、乱れていた気持ちがゆっくりと落ちついてゆく。

小夜子は納得できていないようだ。小夜子の中でこの件はどういうことになっているのだろう。克大がそれを想像するよりはやく、彼女は言った。

「中学生のとき、直哉くんが家出したのはどうしてですか？」

不可解だ、という思いが剥き出しになっている。母親を捨てた男の誘いに直哉がなぜ応じるのか、理解しかねたということか。

「古い話だなあ」

克大は眉尻を下げた。

「あれはおれの……」

不徳の致すところで、と曖昧に答えようとしたが、途中で止まった。

(そういえば、あれは結局なんでだったんだっけ?)

本当の理由が、実のところ克大にもはつきりわかっていない。いろんなことが重なりすぎて、何が一番直哉にとって重大だったのかわからないままなのだ。

しおりの友だちだと嘘をついたから? 彼女と結婚したから? だけど直哉は一度家に戻ってきた。嘘も結婚も許されて、やり直せるのだらうと思った。でもやっぱり駄目だった。

(一体なにが駄目だったんだ?)

本当の父親が彼に会いたくないと思っっているのを知ったから? 本当にそれが原因なのか?

違う気がする。だって、直哉は父親のことなど一度も口にしなかったのだ。会いたいとも、会えなくて辛いとも。克大があの家を訪れてから、出ていくその日まで。とうとう一度も言わなかった。

(だったら……)

彼は、最後に、なんて言った?

(克大さんのこと好きだよ)

(でも、家族にはなりたくなかったんだ、絶対に)

……それは、どうして?

頭の奥がくらくたと揺れた。

「大島さん?」

小夜子の声が遠い。

思い出していたのはさっきの口づけ。

何かがつながり、一本の線になろうとしているのがわかった。だけど克大は目をそむけた。

「あれは……おれのせいだったんだ」

つぶやいた声は自分のものとも思えないほど重い。  
そのせいだろう、小夜子は、それ以上問いかけるのをためらった  
ようだった。話はそこでおしまいになり、胸の中になんとも言えな  
い苦い味だけが残った。

\*\*\*

ずっと知らずにいられたのなら楽だったのだろう。だけど、そん  
なことがかなうはずもなかった。そうやって曖昧にするつもりなら、  
直哉はあのとキスなんかしなかったのに違いない。

四月になり、言葉通り入社してきた直哉を、克大は意図的に避け  
ていた。

自分らしくない行動だ。こういう、ぐずぐずしたのは向かない。  
いつもだったら何もかもさっさと明らかにして、さっぱり終わらせ  
ていただろう。だけど、今回だけはどうしてもそれができなかった。  
しかし、いくら望んだって、狭い社内ですらまでもそんな状態を  
保てるはずがない。

そのときはとうとうやってきた。

取引先からの帰り道、直帰するつもりだったのに、会社に明日ま  
での書類を残していることを思い出した。朝にしようかどうか迷っ  
て、結局戻ることを選択した。大げさかもしれないけれど、そこで  
運命が決まったと言っている。

しんと静かな夜更けのフロア、電気のついたままになっていたそ  
こをのぞくと、直哉がひとりパソコンに向かっていた。克大は彼の  
背中と、ふっと暗くなったモニターを見つめた。ちょうど電源を落  
とし終えた彼は、気配を察して振り返った。そしてにっこり微笑ん  
だ。

「同じ会社にいるのに、久しぶりだね」

声をかけられ、克大はぎこちなく「ああ」と答えた。こんなことが、今までの人生で一度でもあっただろうか。おかしくなるくらい腰が引けていた。

相手は直哉じゃないか。何をこわがることがある。

言い聞かせ、克大は彼の側まで歩み寄った。そしてそれを後悔した。

こわいのは、直哉だから、だ。

「おれと会わないようにしてた？」

くるんとした目にじっと見つめられる。かわいいはずなのに、息苦しいような気分になった。

「まさか」

短い答えに、直哉は目を細めただけだ。笑ったように見えたけれど、もしかしたら違っていたかもしれない。

「克大さんをわかりやすいと思ったの、はじめてだよ、おれ。小さいときはさ、なに考えてんだろこのひとつで、そう思っただけだった」

そう言っ、彼は一步距離をつめる。克大は後ずさりしたいのをぐつとこらえた。

「おれと話したくないでしょ」

ひとを試すような物言いをする。昔はこんなふうではなかった。変わったのだ、と改めて克大は思う。

入社以来直哉を避け、声の届くところに行かないように気をつけながら、遠目にときどきその様子をうかがっていた。しおりの言ったとおり、彼は子どもの頃よりもずいぶん人当たりがよくなくなったように見えた。他人に対しての壁が薄くなったと言う方が近いだろうか。にこやかにポンポンと物を言う、若くてかわいい、そういう評判ですよと管理課の女の子が言っていた。

立ちつくす克大に、直哉はやさしく微笑んだ。

「でもおれは、もういいかげんはつきりしちやおうと思うんだ」

待ってくれ、と本当は言いたかった。軽口を叩いて回避すること

も、やろうと思えばできただろう。だけど、直哉がほんの一瞬ひどく辛そうな顔をしたから、克大は微動だにもできなくなった。

「おれ、克大さんのこと好きだよ」

びくつ、と心臓がけいれんを起こしたような気がした。

なにも初めて言われたわけではない。覚えがあった。たぶん二度あのととき自分はどうしただろう。おれも好きだ、と言わなかったか。なんのためらいもなく、彼の体を抱いたのではなかったか。

「ねえ、聞いてる？」

首を傾げ、直哉は再び同じ言葉を繰り返した。好きだよ、と。

昔は当たり前前に受け止められた。単純にうれしいと思っていた。

それなのに、今は返事もできないでいる。

「どういう意味なのか、説明しなくたってわかるよね」

まるでいたぶられていようだった。

意味ならわかる。わかるから動けない。

いつからそうなんだ。ずっとそうだったのか。だったら、おれは  
- - -。

「無理だ」

頭はまだ混乱しているのに、口ははつきり答えを紡いだ。自分の中にある頑なな何かが、反射的にそれを言わせた。

「それは無理だ」

直哉は、肩の力を抜いたように見えた。気持ちをホッとゆるめたような。そしてなんだか複雑な顔をした。

「そうだろうね」

「ナオ」

とっさに呼んでしまったのは、何か危ういものを感じたからだ。

だけど、彼は苦笑した。そして、そういう声出さないでよ、とため息まじりに言った。

「気にしないでいいよ。おれはもう大人だし、これくらいのことはいくらでもないんだ」

本当に？ 問いかけは胸の中でだけ。



「すつきりしたよ、これで」

直哉はこちらに目を向けず、机から鞆を取り出した。

「じゃあね」

少しも取り乱さずに言い、彼は部屋を出ていった。克大は、扉が閉ざされるのをぼんやり見つめた。しばらく立ちつくしていたが、何を考えていたというわけでもない。

体の機能が停止してしまったようだった。

ようやく指先を動かしたとき、胸の中を冷たいものが通り抜けていくのを感じた。立っているのが辛い。近くの椅子を引っ張り、どさりと掛けた。

(無理つて……なんだ?)

ぎいっと椅子の背にもたれ、首をそらす。

なんだかなしくてたまらなくなつた。勝手に眉が寄つてゆく。

たぶん、無理ではなかつたのだと思う。

無理ではなかつた。

でも、いいよとはとても言えなかつた。

(だって、あんなにかわいかつたんだ)

自分の子どもか弟のように思っていた。本当にそれだけだった。

かわいかつたし、大事だった。そんな目ではとても見られなかつた。

(なのにどうして今、あいつとどうにかなれるっていうんだ)

直哉のことを今もかわいいと思う。だからはつきりと気持ちを告げられるのがこわかつた。

こんなに好きになつた相手は、ひとりもない。

自分の気持ちが傾いているのはわかつている。だけどやっぱり駄目なのだ。

欲望のまま足を踏み外すことはできない。それは許されないことだろう。ひどく悪いことであるような気がしてたまらない。

彼をいとしく思う分だけ苦しい。

ふ、と息を漏らし、克大は内ポケットから煙草を取り出した。静かな部屋に火のともる音が鮮やかに響く。深く吸い込み、吐き出し

たら、じんわりと気持ちが鎮まった。

いろんなことがつながって、曖昧だった過去が正しい形を作っている。

いつから、と言うなら、きっと中学生のときからだったのだろう。家族になりたくないといったあの頃から。

好きだから、家族にはなりたくなかった。

あれは言葉のまま、そのとおりの意味だったのだ。

「ひどいことしてたんだなー、おれ」

ひとりきりの部屋で、克大はぽつんとつぶやいた。

だけでもう取り返しがつかないし、ひとつも望みをかなえてやれない。

ごめん、と謝りかけてやめた。言っただって無駄なこと。

目の際が濡れたのは、煙が染みたせいだったのに違いない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7820v/>

---

どれだけ時間が過ぎても

2011年10月2日22時32分発行